



出雲神楽



STORY OF

IZUMO KAGURA

かぐら 神楽ってどんなもの？

日本では、古くから、岩や木などの自然などあらゆるものに神が宿ると考えられてきました。そして、人間が自然に対して共鳴、共感する心を具現化し、その美意識を大切にしてきました。

「かぐら」という言葉はもともと「神を招き鎮めるところ」という意味の「神座^{かみくら}」で行われる祭りという意味だったと言われています。「カミクラゴト^{なま}」が訛り、コトが取れてさらに訛って「カンクラ」になり、そして「カグラ」となったという説があります。

はるか昔の神話の時代、太陽の神・アマテラスが天の岩戸^{あめ いわと}へこもってしまったために、世の中が暗闇となり、多くの災いが起こりました。皆が困ったとき、アメノウズメが岩戸の前で面白おかしく踊って、アマテラスを外へ連れ出すことに成功し、世界は再び明るくなったといわれています。

— 神さまを楽しませるために舞う — これが、神楽^{かぐら}の起源といわれています。



出雲神楽の歴史

島根県は全国的に見ても神楽^{かぐら}が盛んな地域で、現在、県内には200を越える神楽団体が 있습니다。県内の神楽は、出雲、石見、隠岐の地域ごとに独自の特徴を持っています。

出雲地域の神楽を「出雲神楽」といい、その最大の特徴は、「七座^{しちざ}」「式三番^{しきさんぱん}」「神能^{しんのう}」という三部構成になっていることです。

古い出雲神楽に、佐太神社^{さだ}（松江市鹿島町）で作り上げられた佐陀神能^{さだ}（国指定重要無形民俗文化財／ユネスコ無形文化遺産）があります。

三部構成をとる出雲神楽のうち「七座」は、神楽の場をまず祓^{はら}い清めるために演じられ、面をつけずに手に採物^{とりもの}（道具）を持って舞う儀式的な舞です。

「式三番」と「神能」は、江戸時代に加えられたと言われています。近世のはじめの慶長年間（1596～1615）、佐太神社の神職が京の能を学んで帰り、それを従来の神楽に取り入れた、という言い伝えがあります。松江藩の儒学者・黒澤石斎^{くろさわせきさい}が記した『懐橘談^{かいきつだん}』（承応2（1653）年）には、松江城下で「神能」を演じた記事があり、少なくとも江戸時代初期には「神能」は存在していたようです。佐陀神能は、出雲地域の神楽に大きな影響を与えました。そして、神楽は三部構成をとるようになりました。

ただ、出雲神楽のなかには、佐陀神能が成立する以前から演じられていた「五行^{ごぎょう}」などもあり、歴史の長さをうかがわせます。

こうした出雲神楽は、毎年秋になると、地域の祭礼行事として氏神に奉納され、地域によっては夜更けまで舞う「夜神楽^{よ かぐら}」が演じられます。

神にささげるものだった神楽の儀式は、神につかえる神職などの限られた人が舞っていました。しかし明治時代のはじめ（1870年頃）、神職による神楽が禁止されたために土地の人々に受け継がれたものもありました。地域の人々によって舞われる神楽は、その土地を守る氏神のために、神社の祭りで舞われます。

出雲神楽の特徴

しちざ 七座

神楽の場をまず祓^{はら}い清めるために演じられ、面をつけずに手に採物^{とりもの}（道具）を持って舞う儀式的な舞です。面をつけず、様々な採物を持って舞います。七つの演目から構成されるため七座と呼ばれますが、その演目は地域によって異なります。



塩清め 「清浄」を意味する塩で、場と人々を清め祓います。



しほうけん 四方剣 四人の舞手が、前段は鈴と幣を、後段は剣をもって舞います。神楽の場を祓い清める演目です。



八乙女 出雲市内では四人の少女による舞が伝えられています。



かんじょう のりと かみおろし 勧請／祝詞／神卸 出雲市内では、祝詞を奏上し、三十番神を読み上げたのちに「天蓋^{てんがい}」と呼ばれる装置を上下に揺らして神を招きます。

しきさんば 式三番

能楽の祝いの曲を神楽に取り入れたものです。もともと「翁^{おきな}」「千歳^{ちとせ}」「三番叟^{さんばそう}」の三つからなりますが、このうち「三番叟」は、子どもによる舞として人気があります。



しんのう 神能

主に、『古事記』や『日本書紀』に記された神話や神社縁起などを題材とした舞のことで、「国譲り^{くにゆずり}」や「八岐大蛇^{やまたのおろち}」「日御碕^{ひのみさき}」など、出雲地域を舞台にした演目も多くあります。

コラム入る



出雲神楽の演目紹介

出雲神楽を代表する演目をいくつかご紹介します。(演目名や登場人物、ストーリーの内容は、団体や演目によって少しずつ異なります)

キーワードは榊！ 山の神

七座と神能の間をつなぐ神楽。榊が神事や神楽で使われる由来が分かります。

「^{あめ いわと}天の岩戸」の神話を背景とした神楽です。

太陽の神・天照大神が^{あまてらすおおみかみ}天の岩戸にこもってしまふと、世の中が暗闇となり、多くの災いが起こりました。困った^{やおよろず}八百万の神々は相談して、天照大神に出てきてもらうため、神楽を舞うことにしました。神楽に必要な^{さかき}榊の木を取りに行くことになった春日大明神は、^{かすがだいみょうじん}柴叟になりすまして、^{あめ}天の香具山へ向かい、無断で榊を持ち帰ります。

榊がないことに気づいた山の神・^{おおやまづみのみこと}大山祇命と榊を持つ者が、逃亡と追跡を繰り返した末、ついに榊を持った者が捕まります。

ところが、大山祇命は、捕まえた者が実は春日大明神だと分かると、たちまち恐れ入ってひざまずき、榊を譲ります。大山祇命はその代わりに春日大明神から剣を授かり、世の悪を鎮める、というお話です。



国譲り神話 荒神

『古事記』・『日本書紀』の「国譲り神話」を題材にした神楽で、別名を「国譲り」とも言います。



^{たかまがはら}高天原から派遣された2柱の神、^{ふたはしら}武御雷神、^{たけみかづちのかみ}経津主神は、^{ふつぬしのかみ}大国主神に国譲りを迫り、^{おおくにぬしのかみ}大国主神とその子^{ことしろぬしのかみ}の事代主神は賛成しますが、気性の荒いもう一人の子、^{たけみなかたのかみ}武御名方神は力比べで立ち向かいます。戦いの末に敗れた武御名方神は国譲りを承諾し、^{しんしゅうすわ}信州諏訪（現在の長野県）の地に鎮まり平和が訪れます。

使者の2柱の神と、国を渡すまいとする武御名方神との激しい戦いが見所です。



すさのおのみこと やまたのおろち
素戔鳴尊VS八岐大蛇の決戦!!

素戔鳴尊は、乱暴を働いた罰として、高天原を追放されます。出雲国の斐伊川の川上に降り立った際に、嘆き悲しんでいる老夫婦（手名槌・足名槌）と稲田姫に出会います。話を聞くと、8人いた娘が毎年1人ずつ八岐大蛇に食べられてしまい、今ではここにいる稲田姫1人になってしまったというのです。八岐大蛇とは、1つの体に頭が8つあり、8つの谷山を這いまわる恐ろしい怪物でした。

そこで素戔鳴尊は、稲田姫を妻に迎えることを条件に大蛇退治を約束します。毒酒でおびき出し、酔った八岐大蛇を剣で成敗します。倒した大蛇の尾から見つかった天叢雲剣は、現在に伝わる三種の神器の一つ、草薙剣と言われてています。



やと
八頭

よく知られている、八岐大蛇退治の神話を題材にした神楽です。



征夷大將軍として有名な人物が登場! 田村 里人のおもしろい動きが見所です。



伊勢国（現在の三重県）の鈴鹿の山に鬼が住みつき、天下に悪行を行っていると聞き、時の天皇は、坂上田村麿將軍にこれを退治するように命じます。將軍は伊勢国に行き、そこで里人を呼び、山の様子を詳しく聞くと、里人は鬼を退治してくれるなら山道を案内すると言います。山に入ると鬼が出てきて、互いに名乗り再び斬り合いになりますが、鬼は切られ、將軍はかしらを持って舞い収めます。



「日が沈む聖地」を守る! 日御碕

天竺（現在のインド）から攻めてきた悪い神の彦張が率いる十羅軍の大軍を、日御碕大明神が得意の弓矢で撃退し出雲の国を守る、というお話です。

夜神楽の最後に舞われることが多く、別名「夜明けの彦張」とも呼ばれます。



奏楽・道具・衣装

神楽に不可欠なのが、音楽や豪華な衣装、そして面です。

奏楽

出雲神楽では、鑾（大太鼓）、締太鼓（小太鼓）、笛、手拍子（銅拍子）、大鼓、小鼓とさまざまな楽器が使用されます。七座では、鑾、締太鼓、笛、手拍子を用いるのに対し、式三番では鑾のかわりに大鼓、小鼓を用います。また、神楽能では締太鼓、笛、手拍子を用いることが多いですが、演目によってはここに鑾が加わります。大鼓・小鼓を使用するところに、能の影響をみることができます。



鑾(大太鼓)



締太鼓(小太鼓)



笛



手拍子



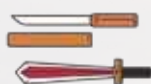
鼓

持ち物「採物」

手に持つ道具は、演目によってさまざまです。



幣



刀



弓



扇



神

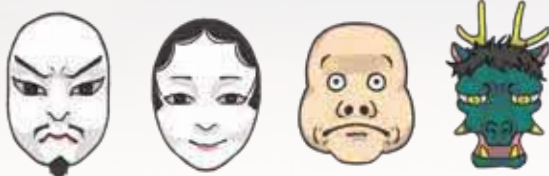


鈴



釣竿

面



「神楽面」といいます。面をつけることで、ストーリーに登場する神や鬼になりきることができ、私たちも迫力ある姿を楽しむことができます。面にも、地域の特徴が見てとれます。出雲神楽の場合は、木を彫り出してつくります。一方、島根県の西部（石見地方）で舞われる石見神楽には石州和紙が使用されます。

衣装



頭には冠や烏帽子を付けます。姫は冠を付けます。また、多くがその下に赫熊と呼ばれる髪の毛をつけ、時には鉢巻をします。衣装は上体に千早、下体に差袴もしくは大口をはきます。布地は金襴です。

さまざまな姿の八岐大蛇

出雲地方を舞台にした八岐大蛇退治の物語は、出雲神楽を代表する演目として親しまれています。ところで、出雲神楽では八岐大蛇がさまざまな姿で登場します。出雲市内では手足と尾がある“トカゲ蛇”が多く、飯石郡を中心に伝わる奥飯石神楽では獅子舞のような“幕蛇”、また松江市の佐陀神能では立った姿で現れる独特な“立ち大蛇”が伝わっています。なお、佐陀神能の大蛇に使用される面は、八つの頭を表現するため16の目が描かれています。

トカゲ蛇



大原神職神楽

トカゲ蛇



唐川神楽

幕蛇



奥飯石神職神楽

立ち大蛇



佐陀神能

提灯蛇胴



赤塚神楽

神楽面ができるまで

おおやまづみのみこと

出雲神楽を象徴する神楽面は、どのようにして作られるのでしょうか。演目「山の神」に登場する大山祇命の神楽面の制作工程を紹介します。

〈取材協力：杉谷工房 彫物師・杉谷 茂さん〉

工程1「木取り」

出雲神楽の面は、木で作られています。神楽面は大きいので、主に桐が選ばれます。桐は軽く、シミや色むらの原因となるヤニがほとんどでないため、長い期間使用される神楽面に適した材です。

まずは、準備した桐の用材から神楽面の輪郭を切り取ります。「山の神」は彫りが深く立体的なため、厚みも十分考慮されています。



工程3「仕上げ」

荒彫りした神楽面の表面を彫刻刀や小刀でゆっくり丁寧な彫りに進め、全体の形を整えていきます。次に目や口、鼻に穴をあけます。

最後は紙ヤスリで表面を滑らかに仕上げます。昔はトクサ（砥草）という植物を乾燥させたもので表面を仕上げていました。

表面が仕上がったところで、両眼と口に金物をはめ込みます。



工程5「毛植え」

髭や眉毛には、長くて丈夫な馬の尻尾の毛を使います。キリやドリルで穴をあけ、毛を植えてから接着します。植える箇所によって毛の長さや量を調整しながら作業します。なお、馬の毛は、神楽面だけでなく、かつらである赫熊にも使われています。



工程2「荒彫り」

荒彫りは、神楽面作りの中で、もっとも重要な工程です。「荒彫りですべてが決まる」といっても過言ではありません。目や鼻、口の位置をきちんと割り付けて、一気に彫りあげます。頬や額などの表現には、彫物師の経験に裏打ちされた技が活かされます。

20本以上のノミや彫刻刀を使い、大きく彫る箇所は大胆にノミで削り、小さな箇所は彫刻刀で刻みながら、神楽面の骨格が決まっていきます。



工程4「彩色」

胡粉^{※1}と膠液^{※2}を混ぜ合わせた塗料を塗って下塗りを行います。

いよいよ色を着けます。山の神では、大きく「黒、赤、薄茶」の3色を使います。黒は墨、赤はベンガラ^{※3}、薄茶は岩絵具^{※4}を使います。岩絵具の代わりに、紅茶などから取り出した色を使うこともあります。それぞれ膠液を混ぜ、髭や皺の間は、細かくグラデーションをつけながら塗り進めていきます。

- ※1 貝殻の粉を焼いて作る白色顔料
- ※2 動物の皮などを水で煮て乾かし固めた膠を水で溶いたもの
- ※3 酸化鉄を主成分とする赤色顔料
- ※4 鉱石を砕いて作る顔料



完成



杉谷 茂さん ～神楽面への思い～

私は出雲神楽を見て育ち、出雲神楽とともに暮らしてきました。

今の時代は、電動工具など便利な道具がたくさんあり、木の切り出しから面を彫る作業まで、昔よりずいぶん楽にできるようになりましたが、先人たちはそんな文明の利器が無かった時代に、本当に素晴らしい神楽面を、たくさん作っています。

普通、物というのは、時間が経つとだんだん悪くなってしまうものです。しかし、先人たちが作った神楽面は、使えば使うほど、古くなればなるほど、だんだん良くなっていくのです。不思議なものです。

私も、古くなるほど良くなっていく素晴らしい神楽面に少しでも近づけるよう、できる限り自然素材を使い、頑張って作っています。一生勉強だと思っています。



出雲神楽をもっと楽しむ Q&A

◇神楽は宗教など関係なく、誰でも鑑賞することができますか？

はい。もとは神事です。どなたでも、気軽に観に行けるものです。

◇どこで観ることができますか？

地域の神社のお祭りでの奉納や、イベント、発表会などでご覧いただけます。

神楽団体が一堂に集まるものとしては、出雲市無形文化財連絡協議会による「出雲市無形文化財発表会」が毎年秋に開催されています。無形文化財発表会や各団体の奉納などの公演スケジュールは出雲市のホームページに掲載しています。

◇上演時間の目安を教えてください。また、途中で席を立っても良いですか？

1 演目30～45分位が多いです。ホールなどでの上演では、1 団体1～2 演目で上演されることが多いです。できるだけ演目の合間に席を立たれると良いでしょう。

◇神楽をもっと深く知るには？

日本最古の歴史書といわれる『古事記』や、『日本書紀』を読むと、神楽をより深く楽しむことができます。まずは漫画などで親しんでみてはいかがでしょうか。

◇神楽を舞うのはどんな方ですか？資格がいるのですか？

里神楽の担い手は地域の一般の方です。その地域の伝統を守るという使命のもと、舞の保存と継承に努めておられます。また、団体によっては、子ども神楽もあります。子どもたちも、自然と日本神話のお話に触れているのですよ。

主 催 文化庁・独立行政法人日本芸術文化振興会

お問い合わせ 出雲市市民文化財課

〒693-0011 島根県出雲市大津町2760番地(出雲弥生の森博物館内) TEL 0853-21-6893

【参考文献】 石塚尊俊著 『出雲神楽』(出雲市教育委員会 2001年)
島根県立古代出雲歴史博物館編集 『島根の神楽 - 芸能と祭儀 -』(日本写真出版 2010年)
出雲市無形文化財連絡協議会 『出雲市無形文化財連絡協議会50年の歩み』(2016年)

【写真提供】 市森神社神楽保存会／大土地神楽保存会神楽方／赤塚神楽佐儀利保存会／外園神楽保存会／宇那手神楽保存会／見々久神楽保存会
阿宮神能保存会／唐川自治会 唐川神楽／佐陀神能保存会／大原神職神楽保存会／奥飯石神職神楽保存会／島根県古代文化センター
加島 美知

【協力】 杉谷 茂／杉谷 勇樹／藤原 宏夫／出雲市無形文化財連絡協議会

